



御忌の由来



法然上人は建暦2年(1212)1月25日、80歳で往生されました。「御忌」とは、この法然上人のご遺徳をしのぶ法要です。

「御忌」は、元来は天皇や皇后の命日の法要の尊称で、この語を使用するのは一般には許されないことでした。浄土宗が、この語を使えるようになったのは、大永4年(1524)、後柏原天皇が知恩院25世超誉存牛上人に「浄土宗を開かれた法然上人の恩徳を忘れないように、入滅された知恩院で7日間の御忌をつとめなさい」という『大永の御忌鳳詔』を出されたことがきっかけでした。以降、知恩院では上人が往生された1月に毎年御忌が行われましたが、明治

10年から桜が咲きほこる4月に日程が変更されました。今では他の大本山や一般寺院でも4月に行うところが多くなっています。

浄土宗の教えは、法然上人がその生涯を通して見出された、「南無阿弥陀仏」となえることによって老若男女関係なく極楽浄土に往生することができる、というものです。この教えにより民衆はどんなに救われたことでしょうか。なにしろ、それまでの仏教では、民衆は仏教と縁を結ぶことすら難しかったのですから。「御忌」は、阿弥陀さまのお力により“誰でも往生できる”とお示しくくださった法然上人の恩徳をしのぶ、とても大切な法要なのです。



御忌の春

現在、総本山知恩院と5つの大本山は、1月25日の法然上人ご命日ぎよきに勤めるの御忌とは別に、桜花らんまん爛漫の4月に盛大な御忌を勤めています。しかし、その昔は1月25日（旧暦・現在の2月中旬から3月上旬頃）に盛大な御忌を勤めました。江戸時代の『東都歳時記』という本には、江戸の芝・増上寺で大名行列のようなお練りをする御忌の様子が正月二十五日の日付で描かれています。

京都・知恩院の御忌は7日間勤められる盛大な法要で、俳句の季語にもなりました。京都で暮らした江戸中期の俳人・蕪村ぶそん なにわめは「難波女や京を寒もうでがる御忌詣」と詠んでいます。御忌が1月の行事だった頃のことです。

当時の交通では、大阪から京都まで淀川を舟で往来するのが普通でしたから、難波女たちも川風に吹かれながら京に上り、大騒ぎをしているようです。大阪弁で「京都はほんまに冷えますなあ」とか言ったのでしょうか。

この句は、女性たちが寒い寒いと不平をもらしているとは思えません。というのは、女性たちが遠出できる機会はたいへん少なかったからです。まして、商家の暮らしは質素で、厳しいものでし

た。しかし、法然上人の御忌の日には、はるばる京に上って物見遊山ものみゆざんができたのです。少しぐらい寒くても、にぎやかに連れだってお参りしたのではないかと思われるのです。

京の娘たちにとっても、御忌は楽しい行事だったようです。

「着だをれの京を見に出よ御忌まふで」

やはり江戸中期の俳人・高井几董たかいきとうの句です。京女たちは着飾って、弁当持参で知恩院に詣でました。「御忌小袖」「衣装競べ」「弁当始」という季語もあります。その「御忌小袖」はとびきり派手なものであったようです。しかし、御忌のお寺参りに派手な衣装では、ちょっと罪深い気がします。だから、「暖かに着て罪深し御忌小袖」（草卓そうぶ）という句もあります。新春のことですから日々にあたたかさが増してきたことでしょう。

世の中には大きな災害が絶えません。東日本大震災は復興途上ですし、さらに大きな災害にも備えなければなりません。しかし、あたたかい御忌の候、「人の世やのどかなる日の寺林」（其角きかく）という心のゆとりはもっていたいものです。

（作家・評論家 大角 修）